

# 東京バッハ合唱団 月報

[第560号] 2009年2月

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101 Tel : 03-3290-5731 Fax : 03-3290-5732  
E-mail : bachchortokyo@aol.com http : //www2.tky.3web.ne.jp/~bach/chor/

BACH-CHOR, TOKYO

Monthly Newsletter No.560  
February 2009

5-17-21-101 Funabashi,  
Setagaya-ku, Tokyo

## ドイツの伝統と文化、教会

## シュトゥットガルトを中心に

南 吉衛 (パウロ教会協力牧師、団友)

「ドイツはどんな国ですか」と聞かれたとき、一言で答えることはほとんど不可能である、と宣教師・牧師として海外生活の経験のある、同僚のドイツ人牧師が言っていました。これはもちろん日本にも当てはまりますが、ドイツは日本以上に、地方、独立した州の特色が濃い国です。わたしが住んでおり、こんど合唱団の方々をお迎えするバーデン・ヴュルテンベルク州も例外ではありません。とくに州都シュトゥットガルトは、シュヴァーベン地方とあって独特の風土と伝統、歴史をもっています。方言が強く、他の州の人たちから突出している面があります。人々は概して信仰深く、勤勉です。それが、世界的自動車会社のダイムラー・ベンツを産みました。勤勉と、そこからくる新しい物を造りだす努力が、高級車ベンツの誕生と発展に貢献したのです。風土にも恵まれた州で、隣国がスイス、オーストリアの観光地であり、さらにこの州には、シュヴェービッシュアルプという標高1000メートルの宏大な高原大地があり、そこには、城、城跡、修道院などが少なくありません。

シュトゥットガルトの町自身も、すり鉢型の底の部分を呈しており、「地下鉄(U-Bahn)」と呼んでいる市内電車は、じっさい地下を走るの中央駅周辺の5分間くらいで、直ぐに地上に出ます。3方が山・丘に囲まれ、電車は高台へと登っていきます。わたしの住んでいるところは600メートルの高台にあり、途中、電車は町全体を見渡せる丘を走っていきます。中央駅のすぐそばの高台に葡萄畑が見えるのもこの町の特色でしょう。屋根の色は赤。ケルン周辺の黒とはまったく違います。「こんにちは！」の挨拶も、ふつう標準ドイツ語では「グーテンターク」と言いますが、この地方の人たちは「グリュースゴット」です。

この町には、州立音楽大学があり、有名です。オペラもバレーもまた国際的な評価をすでに得ています。オペラは、とくに演出が斬新であることで有名で、わたしはすでにピゼーの「カルメン」とモーツァルトの「魔笛」を見ましたが、オリジナルであるべき音楽は別として、演出が、原作にない「影の」人物が登場したり(「カルメン」)、子供には見せたくない場面・映像が出てくるときもありました(「魔笛」)。現代的な演出のオペラについては、評価が別れるのは当然です。しかし州立オペラ劇場で上演されるオペラについては、いつも満席です。

音楽やその他の芸術に対する伝統の深さと広さには、驚かされます。本来それらは、家庭で育てられるとあって良いでしょう。昨年のクリスマスイブに、わたしは同僚の家庭に招かれ、感銘深いひとときを過ごしました。もともとイブは家族が集まり、家庭で祝うものです。町や村々の教会では、午後4時前後の「家族礼拝」から始まり、この日は3回の礼拝があるのが普通です。2回目は7時過ぎ、3回目は10時過ぎで、これは「音楽礼拝」として祝われます。

わたしは、同僚の家族と、その12歳、10歳、6歳の3名の男の子も一緒に、4時半から始まる家族礼拝に出席しました。礼拝の中では、クリスマスページェントが、舞台装置も本格的に、子供中心で演じられ、礼拝堂は満席でした。

家に帰ると、しばらく子供たちは自分の部屋で待機し、食事の準備ができるまで、居間に入ることは許されません。今夜はどんなご馳走がでるのだろうか、ツリーの下にはどんなプレゼントが置かれているのだろうか、子供たちは「入室許可」を待っています。準備ができたことを母親が知らせにくると、子供たちは、カーテンで仕切られていた部屋に入っていました。部屋全体が、わたしにとっては、素晴らしいクリスマスの「伝統的な」飾りつけでした。ローソク、ツリー、馬小屋の飾りなどです。食事の前に、両親と長男とで、ブロックフレーテ(リコーダー)によるクリスマスの曲の演奏です。才能とか技術を問わない、何か温かい、ほのぼのとしたものをわたしは感じました。食事が終わってからは、こんどは、皆でクリスマスの歌を数曲歌い、さらに上の男の子2人による吹奏楽器の演奏です。音楽が、家族で祝うイブの雰囲気を作っているかのように感じました。



家庭クリスマスの一駒

そうです。ドイツの子供たちは、このような音楽的雰囲気の中で育ってくるのです。上記のように、特別にだれかピアノやヴァイオリンの先生について学んだのではないのです。同僚の家庭は、3世代がいっしょに住んでいて、信仰を大事にする人たちです。奥さんの両親は葡萄栽培の農家で、ワインケラー(地下室)のある家は、彼女の祖父が80年前に建てたものだそうです。

わたしの親友の引退した牧師は、よくわたしに「ドイツでは、新聞を読むこと、ラジオのニュースを聞くこと、賛美歌をいくつか暗記すること、詩を誦んじて詠むこと」と勧めます。わたしは「言われなくても、必要であれば自分からする」と言い返していますが、友人は、このわたしの答えに満足していないようです。実は、こういう勧めのなかにドイツの「文化」を見る思いがします。ドイツ語がある程度話せ、ドイツでの生活にあまり困らない、といっても、それでドイツやドイツ人、ドイツの文化を理解したわけではありません。クリスマスイブにわたしが経験した小さな出来事についても、長い伝統と文化があります。シュトゥットガルトは、そういう古い伝統・文化と、現代的な芸術が併存している町であるといえるでしょう。



エルツ山岳地帯の手工芸品。ここにも音楽が生きている

町の中心部、中央駅から「王様の道」を繁華街沿いに歩いてくると、シュティフト教会が見えて来ます。この町を象徴する教会です。ドイツでは、教会の周辺に住む信者によって会員が構成されていますが、シュティフト教会には、遠方や、少し離れた所に住む人たちも、多くやって来ます。定期的なコンサートもあり、クリスマスのシーズンには、とくに人々が集まります。またこの教会は、この州を代表する顔です。現在は減少したとはいえ、この町では人口の3分の1がキリスト者です。したがって、政治・経済の問題などについても、教会を代表して発言するのは、このシュティフト教会の牧師の役割です。牧師の就任式や送別礼拝には、かならず市長がやってきて挨拶をします。日本では考えられません。そこには音楽という文化があり、バッハの「クリスマス・オラトリオ」や「マタイ受難曲」が演奏されるのです。教会が文化の中心を担い、その中で、信仰が養われていきます。

今夏、東京バッハ合唱団が公演を予定しているパウロ教会は、会員4000人、2人の牧師が仕えています。これ

パウロ教会礼拝堂の聖壇(下)と会衆席のステンドグラス(右)



も日本とは比較になりません。では、何人くらいが日曜日の礼拝に出席するか

ですが、これはだいたい会員の4パーセントといわれ、150人から160人になり、実際そのくらいです。教会は、市の西部に位置し、ここはどちらかといえば文教地域です。音楽活動も熱心で、教会独自の合唱団をもっており、定期的にコンサートを開催しています。役員は全部で10名、教会の規模からすると大変少ないように思います。全員60歳未満です。住いが教会から徒歩で行ける人たちがばかりであることも、教会が「地域教会」であるドイツの特色です。

また、もう一つのコンサート会場、多くの団員の皆様の宿泊場所ともなる「ムターハウス」は、生涯を「奉仕女」として献身した婦人たちの「終(つい)の住処(すまか)」です。朝食を一緒にとるだけでも、この人たちから何かを感じられるでしょう。

[写真(説明とも):筆者提供]

## <第5回ヨーロッパ演奏旅行>

### 3つの都市と主要教会 (上)

シュトゥットガルト・シュティフト教会  
フライブルク大聖堂(ミュンスター)  
ストラズブル大聖堂(カテドラル)

大村 恵美子

ドイツ各地は、日本と同様、第2次世界大戦で破壊され、そして復興しました。私たちは、今夏の旅行で、ドイツ南西部バーデン・ヴュルテンベルク州の2大都市、シュトゥットガルトとフライブルクとにそれぞれ宿泊して演奏をしますが、この2つの都市は、対照的な戦後史をたどっています。フライブルクは戦争による被害が比較的軽く、昔ながらの街の姿を保ったのに対し、商工業都市シュトゥットガルトは、爆撃によって徹底的に破壊され、戦後、おびただしい瓦礫を取りのぞいたあとに、現代的な新しい都市をつくり上げました。私たちがお招きをいただいたパウロ教会は、戦後、まったく新しく建てかえられた教会のひとつです。

シュトゥットガルトで代表的な教会といえば、シュティフト教会 Stiftskirche で、さいわいにも全壊をまぬがれ、1950年代、そして1999~2003年にかけての大改築

で、いっそう旧状に復すことができました。

私たちが訪ねる諸都市を、こまかく紹介することはできませんが、この2つの都市を代表するそれぞれの主要教会、シュトゥットガルトのシュティフト教会とフライブルクの大聖堂について、すこしご案内しようと思いません。

そのあと、今回は残念ながら日程の都合で演奏することができなくなりましたが、ストラズブルにも1泊して、おもにその大聖堂をゆっくり見学したいと思いますので、そのご紹介もつけ加えたいと考えています。

#### シュトゥットガルト・シュティフト教会

現地の南牧師からのご寄稿のなかでも、このシュティフト教会について触れていただいておりますので、訪問の順序は前後しますが、ここから始めさせていただきます。

シュトゥットガルトの代表的なこの教会は、今はプロテスタント教会で、大きな音楽会もしばしばここで行われますが、中世以来の初期ロマネスク - 後期ゴシック様式の歴史的な遺産も、改築ごとに発見され、保存されています。この都市の文化的中心ともなっているのです。

10~11世紀頃の、身廊が一つしかない村の教会がその起りこり、14世紀頃に、この地方一帯の領主だったヴェルテンベルク伯家の墓所がこの教会に移されました。Chorherren とよばれる神に仕えるひとびとが、領主たちの魂の救いを内陣で祈る役を仰せつかり、かれらの修道院(Stift)から、この教会がシュティフト教会と呼ばれるようになったとのことです。中世末期1495年までに行われた改築で、今日の大きさになりましたが、後期ゴシック様式の会堂は大戦で破壊されて、戦後1950年代に思いついて新しい改築が施され、またその後、多くの欠陥が出てきたので、1999~2003年に広範囲にわたる再改築となりました。

旧市街の中心に位置するシュティフト教会は、形の違う2本の塔(西塔約63メートル、南塔約61メートル)が遠くから眺められて、州都の象徴となっています。



シュロス(城)広場からシュティフト教会の塔を望む(2008.8.28)



シラー広場から見たシュティフト教会。左端は当地出身のシラー像

(下の写真 [http://commons.wikimedia.org/wiki/File:Stuttgart\\_Stiftskirche03.JPG](http://commons.wikimedia.org/wiki/File:Stuttgart_Stiftskirche03.JPG))

#### お・た・よ・り

ハンス・ミヒャエル・ボイアーレ様(フライブルク・バッサ合唱団指揮者)より

このたびは、クリスマスと新年のご挨拶をいただき、まことにありがとうございました。東京バッサ合唱団のクリスマス・コンサートの見事なプログラムもありがたく拝見いたしました。心からお礼申し上げます。

私どもからも、これからの新しい一年に向けて、良きご成功をお祈りいたします。

当合唱団は、昨秋とクリスマスのコンサートを শেষよく終えまして、1月には(第1回目練習日の1月15日に)新年度の計画について詳細の詰めの作業を始めます。当合唱団の団員の中で8月8、9日にフライブルクに残っているのは誰かをきちんと確定することもその作業の一つです。ただ、すでにパウアー氏から直接あなたにお話しましたように、また私からもあなた宛の手紙で申し述べましたように、大学の学年末休暇がすでに7月中旬に始まり、小中学校の休暇も7月30日に始まるという事情から、当地に残れるのはほんの僅かな団員になることを想定せざるをえません。見通しがはっきりしましたら、すぐにお知らせいたします。

とりあえず、あなたと合唱団の皆さまに、心をこめてご挨拶を送ります。(訳・森永毅彦)

菅原文子様(元団員・後援会員)より

12月13日、定演を聞かせていただきました。「マタイ」以来です。アンコールでは、体が自然に歌っていました。12月のこの時に、この曲に触れられて、うれしかったです。赤と緑のカヴァー、とても映えましたネ(ソリストの方も合わせたように)。

新しい年のドイツ公演が成功に至りますように。

佐々木まり子様(声楽家、団友)より

先日は、クリスマスカータータでのコンサートで、お世話になりました。誠にありがとうございました。今回はその後の打ち上げにも、ゆっくり参加させていただき、みなさんとの語らいも、とても楽しいひと時で、感謝いたします。今回はとくに、いつもはテノールが歌う曲を、オーボエ・ダモーレとアルトとで歌ったことが印象的でした。アルトの声域とダモーレのまろやかな音色から、あの曲の本来もっていた曲調を再発見させられたような想いでした。

今年もお世話になりました。感謝をこめて盛岡りんごをお送りいたします。どうぞ皆様によろしく!

[香ばしいりんご、22日のクリスマス忘年会でいただきました。ご馳走さまでした]

# クリスマス会と新年会

## 活気あふれる 2009 年に

華々しく第 103 回定期演奏会(2008 年 12 月 13 日)を終えた後、2 回の通常練習を重ね(15 日、20 日) 12 月 22 日には、一年の納会をかねて、クリスマス祝会が催されました。大きな定演を終えた直後にもかかわらず、2009 年のための新曲(ミサ曲ト短調・口短調)にさっそく取りくむ 2 回の練習にも、ふだんどおり多くの団員が出席し、その勢いはクリスマス会の最後にまで及びました。

当番のアルト団員によって会は周到に準備され、あふれるほどのご馳走、ならんで催されたバザーへの多くの方々からの献品、参加の皆さんからは、間もおかずに披露される独唱・独奏、重唱と合唱、手品に至るまでのおもてなし、2 時間はあっという間に満たされてしまいました。

月報で「全部おすすめ 50 曲選」を連載して下さるバス団員の柳元宏史さんが、彩子夫人、1 歳 10 カ月の彩音ちゃんと 3 人で出席され、新年早々、大学院修了と同時に地方の教会に赴任なさるので、この日が団員最後となりました。「50 曲選」のコラムはひきつづきお願いし、また叶うことなら、年末の合唱団のクリスマス会にはご一家でいらしていただけたら、という希望をお伝えしました。実際、小さいお子さんがたった 1 人加わるだけでも、クリスマス会気分が盛り上がります。団員として入られた 3 人の小・中学生の方々も、可能ならば参加して下さるとすばらしいですね(定演での 3 人の出演は、大好評でしたよ)。

明けて 1 月 10 日、初練習の朝は、大村宅(合唱団事務局)に有志が集まって、バッハの歌い初め、「いろは」と「一茶」の歌留多とり、近くのレストランでフランス料理のランチなど、大忙しの新年会をすごし、午後の桜新町の練習には、アルトとテノールの新入団員お 2 人が待っていらっやいました。この日を待ちかねていた団員とともに、ミサ 2 曲とカンタータ 2 曲(BWV8、131)などを一気に合わせました。すばらしいスタートです。

悲しいことに、1997 年のヨーロッパ演奏旅行にも参加されたアルト団員の佐野庄子様が、その後の長い闘病生活ののち、大晦日に去られました。「偲ぶ会」はあいにくこの初練習の同時刻に重なりましたので、そちらの方には失礼いたしました。佐野様には、早い時期から「2009 年の旅行にも参加を夢みていましたけれど、私の分まで歌っててください」と、多額のご寄付を託されました。

また多くの後援会員・団友の方々からのお年賀状には、旅行の成功を祈る一文を寄せて下さる方が目立ちました。これらを思うにつけても、さらに固い決意をもって、皆様から託された夢を、この困難な年に力強く推進させ、実現させなければ、と思います。

暮から初練習にかけての団員の躍如たる姿は、それに応えるにふさわしいものだと感じられて、頼もしいかぎりです。

なお、教会での今年の公開演奏は、5 月 17 日(日) 15 時・荻窪教会、12 月 5 日(土) 16 時・世田谷中央教会、といずれも決まりました。

(大村恵美子)